～飯田にゆかりの姫君～
大河ドラマ「どうする家康」に登場した福姫（登久姫）の紹介

〇松平信康（家康長男）と五徳（信長長女）の二人の姫　～瀬名（築山殿）の孫娘～

大河ドラマ「どうする家康」第 25 話では、徳川家康が織田信長の命により正室の瀬名（築山殿）と長男の松平信康を死に追い込まざるを得なくなり、瀬名と信康が亡くなる悲劇が描かれました（築山殿事件、信康事件）。ドラマ前半のクライマックスとも言えます。その前回の第 24 話「築山へ集え！」では、余り目立ちませんでしたが、信康（家康長男）と五徳（信長長女）の間に生まれた幼い姫も少し登場していました。ドラマの中で家康重臣の酒井忠次が信長に「五徳様ととくひめ様は息災でございます」と告げるシーンがありましたが、その「とくひめ」は二人の姫のうち長女のことで、「登久姫」とも、また別の史料では「福姫」とも呼ばれます。

ところで、未亡人となった信康の正室・五徳（信長長女）は、二人の幼い姫を残して実家の織田家に戻ってしまい、姫たちは祖父の家康の下で育てられることになります。長女の姫は、先程述べたように「登久姫」と「福姫」の両方の呼び方がありますが、姫の菩提寺である峯高寺（飯田市と北九州小倉）では、「福姫」と呼ばれていますので、以後「福姫」としておきます。

さて、家康と信長という両雄を祖父に持つ稀有な血筋の福姫ですが、信長の跡を継いで天下人となった豊臣秀吉の仲介で、14 歳の時に家康の養女として松本城主の小笠原秀政の正室になりました。その後、秀政が下総国古河城主（茨城県）に、そして関ヶ原の戦い（1600 年）後には飯田城主になりましたが、その間二人の間には、８人の子ども（６男２女）が生まれています。しかし福姫は疱瘡にかかり 31 歳の若さで飯田城にて亡くなり、妻の早すぎる死を悼んだ秀政は妻のために菩提寺を建てました。寺は姫の戒名「峯高院殿」から「峯高寺」と名付けられ、姫の墓（宝篋印塔）は飯田市松尾町（飯田駅前）の峯高寺境内（本堂横）にあり、檀家の方のほか多くの方がお参りに訪れます。宝篋印塔の前面には婚家の小笠原家の家紋「三階菱」ではなく、実家である徳川家の家紋「三つ葉葵」が刻まれています。

ちなみに、大河ドラマにも登場したが松平信康と五徳のもう一人の姫（次女。福姫の妹）は、「国姫」または「熊姫」とも呼ばれ、後に徳川四天王・本多平八郎忠勝の長男・本多忠政に嫁ぎ、姫路城主・本多家の正室となっています。

〇福姫の子どもたち ～家康と信長の血を引く稀有な一族～

福姫の夫である小笠原秀政は、その後飯田城主から松本城主に移り、慶長 20 年（1615 年）の「大坂夏の陣」では徳川方として活躍しますが、豊臣方（真田信繁など）と戦って長男の忠脩とともに戦死してしまいます（享年 47）。大将が戦死するのは比較的稀で、この際の秀政父子の徳川家への忠節もあり、その子孫は松本城主→明石城主→北九州小倉城主（15 万石）に出世しました。そのため福姫の墓は、飯田の峯高寺に残されていま

すが、福姫の御位牌と祖父・徳川家康から拝領した御持仏（阿弥陀立像）は、北九州小倉藩に移され、福岡県京都郡みやこ町豊津の峯高寺に所蔵されています（別添資料）。

さて、徳川家康と織田信長を祖父に持つ福姫は、稀有な血筋の姫として特別に扱われたと考えられ、その子供たち、特に二人の姫は大大名の正室に嫁ぎその礎を築きました（別添の詳細系図参照）。

長女の万姫は、家康の養女として四国阿波徳島藩主の蜂須賀家（25 万石）の正室となり、次女の千代姫は、熊本藩主（54 万石）の細川忠利の正室となり、熊本藩２代藩主の生母（国母）となります。細川忠利は、有名な細川忠興と細川ガラシャ（明智光秀の娘・玉）の三男で細川家嫡子となり、熊本藩細川家の礎を築いた人物です。千代姫が飯田城から熊本藩細川家（当時は小倉藩主）への嫁ぐ際の詳細な記録が残されており（別添資料）、飯田城から一旦江戸城にて将軍秀忠（養父）に挨拶をし、駿府の家康（千代姫の曾祖父）の心温まるもてなしと言葉を頂戴し、大阪城での豊臣秀頼のもてなしを受けて海路九州に嫁いだ様子が記されています。飯田藩５万石の姫君（千代姫）が大大名の熊本藩 54 万石に嫁いだことは、母・福姫が家康の孫娘（養女）であり、その娘もまた徳川一族であることの現れと考えられます。

なお、福姫と国姫（熊姫。姫路城主・本多家に嫁ぐ）姉妹の子孫は、別紙の系図にあるように、互いに通婚が行われ、松平信康（家康長男）と五徳（信長長女）の血筋が保たれるようにとの徳川家の意思が働いていたと考えられています。

商業観光課　佐々木記（令和５年７月４日）